

松の葉

「松の葉」といっても、あまりぴんとこない人が多かろう。わが国の移ろい行く四季の折々に、古より風流人が歌った日本人の繊細な感性は、「竹の葉」「笹の葉」「紅の葉」等々微妙な表現方が使われ、「葉」の一葉一葉にも日本のありのままの自然を優雅に映し出してきた。

「竹の葉」は野口雨情が民謡に謡ったし、「笹の葉」は泉鏡花がしばしば引用した。「紅の葉」とは「もみじ」を視覚的に美しく表した、日本人ならではの趣のある言葉である。

しかし、「松の葉」は「松葉崩し」や、その筋の強面の「松葉会」のようにあまり良い意味には使われない。ただ、これも樹木ともども雪を被ると風情は一変して見事なまでに冴え渡る。その「松の葉」には種類によって興味深く明確な違いがあるが、これが意外にも一般にはあまり知られていない。

松の木は、日本では英語で「ニードル(NEEDLE)」と呼ばれる松の葉(針)が2本で1束になっている場合が多い。ところが、「所変われば品変わる」の諺通り、遠目では普通の松でも、葉(ニードル)が2本で1束の松と、3本で1束の松が実際に存在する。五葉松は、5本の葉が1束になって緻密さと華やかさを加えた盆栽用にぴったりの松だが、普段市街や海山で見るとごくありきたりの松の木は、日本人はつい2本葉で1束だと思いがちである。だが、外国では必ずしもそうではない。

1975年アメリカ・テキサス州の高原都市で開催された「アメリカ自然食品協会全米大会」に日本からただひとり参加した時、あるアメリカ人紳士と松のニードルが2本か3本かで楽しい賭けを行った。紳士は近くの松林から松の3本葉を拾って、「どうだ!」と得意満面に突き出し私が兜を脱いだことがある。スウェーデンの松林で拾った松の葉もすべて3本だったが、レスピーギ曲に奏でられた「ローマの松」は2本だった。アジアでは比較的2本葉が多いが、韓国の世界遺産「仏国寺」の松は3本葉だった。どうやら葉の数は気候や土壌が影響しているようだが、決め手となる原因は分からない。皆さんも外国へ行ったら「松の葉」を手にとって、2本葉か3本葉か、確かめてみては?

(近藤節夫)